

楞伽經に於ける「阿賴耶識」と

「如來藏」とに就て

阿 部 文 雄

緒言、此の一文は、余の舊稿「楞伽經原典之研究」と題せる一論文の一部抜萃にして、今より之を見れば大に修補を加ふべき點も有之べんも、遂に之をなすの違なく、殆むど舊稿の一部を其儘轉載せしに過ぎざる結果となれり。

本論文は大正五年に脱稿せるものなれば、文中引用せる梵文原典は後に之を再説する如く、東京帝國大學所藏なる印度傳來の珍本バイタラ葉記載のゴルモール文字の梵文、並にネパール傳來のネパーリ文字梵本の二種丁付に依るものにして、漢譯は縮帙一切經丁付に依る。

其後、梵本には大正十二年南條博士の記念梵本の出版を見、漢譯にありては大正十三年以降に大正一切經の刊行を見たるも、未だ彼此其の引用文を比較對照するの機會を得ず、久しく筐底に藏して今日に至れるものなれば引用文の丁付は總て舊稿の儘とせり。

又、楞伽經研究にありては、近く、鈴木貞太郎博士の博士論文ある由なるも、未だ博士の御高説を拜覽するの機に接せざるを遺憾とす。

因に此經には西藏譯二種あるも、此等は何れもゴエ僧 (Agos) 法成 (chos grub) が、漢譯より重譯せるものにして、而も其一は實叉難陀譯の七卷楞伽經を主とし、之に菩提流支譯の十卷楞伽を参考として譯せしものらしく、其二は求那跋陀羅譯の四卷楞伽の重譯にして、之をなすに當り、法成は王命に依りて支那僧 Wenhū の造れる註解書を参考として譯したる旨を其の「奧書」に記せり。（追て此項は四三頁※を参照）

△研究の材料と其の撰擇

本經研究の材料としては、現存の漢譯三種、即ち最も古き譯は四卷楞伽經にして、之は求那跋陀羅 (Guṇabhadra, 393—468 A. D.) が西紀四百三十五年入支後九年目頃に譯出せるもの、次は十卷楞伽經にして菩提流支 (Bodhiruci : 513 A. D. 所譯) の譯なり。最後は七卷楞伽經にして實叉難陀 siksānanda: 700—704 A. D.) の所譯なり。上記三種は縮刷藏「黃六」所載に依れり。

其他東京帝國大學所藏なるバイタラ葉ゴルモール文字の梵語原典 (高楠博士著來 No. 120) 及びネペーリ文字の梵語原典 (河口慧海師將來 No. 44) の二種となり。此の中前者は極めて古き物にして、甚だ珍本なれども所々落葉あり又角の摺り切れたる所往々ありて、後者は之が参考としてその缺所を補ふに足る。

次に現存漢譯の前記三種の中、余は主として四卷楞伽に依りて其の經の比較的古き部分を窺はんとせり、其の何故なるかは後に期を得て述ぶべけんも、七卷、十卷共に新、古の部分を含有し居るが如く思はれればなり。尙ほ文中 (Taka, Kawi) とあるは各々高楠博士、河口慧海師將來の各梵本の意なり。

一、八 識 説

楞伽經に於ては、識を分ちて八種識となす。但し漢譯偈頌品に於ては明かに九種識と言ふ文あり。「依諸邪念法、是故有識生、八九種識、如水中諸波」(菩提流支譯、黃帙六、六九左)「由虛妄分別、是則有識生、八九識種種、如海衆諸波」(實叉難陀譯縮藏黃帙、六、百十二左)

然れども吾人は、本經は八種識を説くを正統とするものなりと信す。何者は、漢譯の此の部分に相當する現存の原典を檢するに、八種、九種識と言ふは寧ろ譯者の推測より爲せるものにて、原文には八種、九種に當たる *astādhānavadha* は海水の動搖して八重九重と波立つことを云はんとする助詞にして、主文には非ざるなり。故に八種と言ひ九種と言ふに深き意味はなく、偶然にも識と推測せばせらるゝ處より、九種識と斷言せるものと見る方が妥當なるべし。之あるが故に楞伽を以て九種識をも説くとなすは早計なりと言ふべし。以下「八九種識云々」の原文を引用せんに、

⁽¹⁾
Ayonisavikalpena Vijñānam Sampravarttate /

astādhā navadhā citram tarāṅgāni mihodadheḥ // (Taka. 71. b 2)(Kawa 128. a 5)(黃六, 112 左 7)

(1) ayoniṣa ナルベシ

即ち『大海の諸波浪が、八重九重と種々に「生ずるが如く」、識は非如理なる妄想分別に依りて生ず』と言ふべきなり。

吾人は寧ろ本經は其の本流に於ては八種識説を正統としながら、九種識たるべき暗示を存することを認むるに吝なるものにはあらず。何れの點に其の暗示を發見するかと言ふに「如來藏と名けられたる阿賴耶識」の句に之を求めるとするものなり。即ち、此の識は、本經の如來藏緣起を説明するに於て立つる八種識の第八識に當るものなり。此の阿賴耶

と如來藏とを調和せしめんとして、未だ全く融和せらる時期の思想にして、之が転て各々分離し獨立の位置を保つに至りて、九種識となると言ふ準備と認めるとするものなり。故に本節に於ては、本經の正統思想を八識說となし其九種識の暗示ある事に就ては後章之を説くべし。今、八種識を立つるに於て、楞伽の典據を舉ぐれば、「……………
yaduta aṣṭauvijñānam Kātamīy aṣṭan yaduta tathāgatagarbhah ālayavijñānam Samśabditaḥ manah manovijñānam
ca pañca ca vijñāna Kāyāḥ [taka. 64. b. 2] 謂八、識、何等爲八、謂如來藏名識、藏、心意竟識及五識身。(黃六、27411)
e Samśabditaḥ ナルベシ

■⁽²⁾ 八識身

1. tathāgatagarbhah ālayavijñānam Samśabditaḥ = 「如來藏と名けらるる阿賴耶識」(如來藏名識藏)
2. manah = 意 (心意)
3. manovijñānam = 意識
4. Pañcavijñānakāyāḥ = 前五識身

此の文に依つて明に本經は八種識說をなす」とを知るべし。而して九種識は此の Tathāgatagarbhah ālayavijñānam Samśabditaḥ (如來藏 名阿賴耶識) の分裂に依りて必然に生じ來たゆゑか運命を有する思想なる事は項を改めて説くべし。

(2) 八識の相互關係を不可分、無相、無所相となし、海水と浪との關係に譬へたり (黃六、八八左)

註、偈頌品は後節に之を考證する如く (但し本編には記載し難い) 後代の編入なるが如きを以て、或は九種識とも見

れば見らるる様に故意に曖昧なる句を用ひしにはあらざるやゝの疑問あり。

一一、阿 賴 耶 識 (ālayavijñānam)

先づ阿賴耶識に就て本經の所說を見るに、阿賴識は時に Khyātivijñānam (漢譯は現識と譯せり) と言はれ、又時に Jātivijñānam (眞識と漢譯せらる) と言はれ、或は又 Jātlakṣaṇa (眞相) と同意義を有することあり、又如來藏の異名の如く說かるることあり。總じて言へば、阿賴耶識は一切萬有の發展の原因にして、又同時に萬有の歸趣なりと言はんとするものなり。然れども楞伽經に於ては、萬有が阿賴耶識より發展する次第に就いては漠然と比喩的に説く以外に、理論的、組織的に説ける處あるを見ず。假令多少然るが如く説明する所あるにしても極めて簡単にして、其の意味に動搖なくしては考へ得られざる程なり。されば今本經に散見する思想を綜合統一すること甚だ至難なりと雖も、之を概括的に述ぶれば凡そ次の如き意に歸すべし。

「阿賴耶識は一切萬有開發の根源にして、又萬有の歸入する所なり。諸法は、此の識に依りて轉生し、此の識に依りて相續せらる、身も世界も一切の食物も亦然らざるはなし。然らば一切の諸法な如何にして開展するやと言ふに、主觀としては轉識即ち Pravrttivijñānam として、又客觀としては同時生に識境界なる身、資生、器世間等一切の萬有轉生す。轉識とは第一次阿賴耶識が不思議變に依りて開展したる餘の七識を總稱せるものなり、而して此の際の第八識は阿賴耶識と言ひ、又別に第一次阿賴耶識より開展せられたるものを現識 (Khyātivijñānam) と分別事識 (Vastuprativika-lpavijñānam) の二種に別つことあり。此の際は現識は第二次の阿賴耶識とも言ふべきものなり。

然れども、楞伽にては此の時は阿賴耶識の名を以てせずして現識と呼び、轉識に相應するものを總稱して分別事識と楞伽經に於ける「阿賴耶識」と「如來藏」とに就て

するが如し。換言せば、阿賴耶識と所轉の識とを並稱する時は後者を特に轉識と稱し、阿賴耶識を現識と言ふ名を以てする時は、所轉の識を分別事識と言ふが如し。之れ蓋し前者一對の名稱は阿賴耶識と所轉識とを靜的に見ての命名にして、後者一對の名稱は之を動的に見たる場合の名稱にはあらざるか、而して又、求耶跋陀羅譯の四卷楞伽に依れば、現識、分別事識以外に眞識なるものを加へて三種となせり。此は或は未開轉位にある第一次阿賴耶識の事を指しての名稱なるか、又は如來藏を暗示せるものかの何れかなるべし。然し茲には單に疑問として附記し置くに止めん。因に所轉の轉識に相應する法一切を之を *Vijnānaviśaya* (識境) 或は *Vijnānagocara* (識野) とも云々。

儲て本經は、阿賴耶識の開展の様を大海水が境界風に依りて、諸波浪を生ずるに譬ふる事屢々なり。故に、従つて又阿賴耶識を識藏海 (*vijnānālayodadhiḥ*) と稱す。而して之れに對し轉識を呼ぶに諸波浪識 (*turamgavijñānam*) を以てす。

(1) 現存原典は二種となし、眞識なるものを說かざるも、四卷楞伽の譯風より察するに、彼の據れる梵本は確かに三種に別ち眞識なるものを加くことを疑ふべからず。

又阿賴耶識と轉識の關係を瀑流 (*ogha*) に譬へりと屢々なり。

阿賴耶識開の動力因を、不思議董變因 (*acintyavāsanāparināmahetukah*) にありとし、之れに加ふるに無始世來の虛妄分別習氣が縁となり、轉識生じ、而して相互に因となりて轉々不斷相續して、身、資、世間 (*śarīraboghaprasthāna*) を生じ輪轉すること井戸の車の如しこなす。又阿賴耶識と轉識若しくは現識と分別事識との關係を說か、二者の關係は異、不異の關係に立つものとなし、一向に異なりとも、不異なりとも斷言せざるなり。轉識若し阿賴耶識眞相と別異なりとせば、轉識は阿賴耶識を生起因とせざるべく、若し又不異なりとせば轉識滅すれば阿賴耶識も滅する」となるべ

く、従つて眞相滅すべく、さすれば外道の斷滅見と同論なるべきなり。然らば全く不異にもあらざるが故に轉識滅するも阿賴耶識滅せず、従て眞相滅せざればなり。但だ業相滅あるのみ、譬へば泥團と之を構成する土の分子とは異にして又同時に不異の關係に立つが如し、と云はんとす。之れ甚だ窮したる説明にして論理的説明としては妥當ならざるものなり。然れども、之は迷界と悟界との關係にして、苟しくも此の間に理論的道程を求める所とし、迷界中にも亦悟界の階梯又は手段を求める所とせば、又不得止の説明にして、殊に宗教的觀察點よりする時は寧ろ高尚なる見方と言はざるを得ず、若し悟界なる阿賴耶識の本家鄉と迷界なる轉識とは全然沒交渉なりとせば、衆生の解脱は得て期すべからず、又全く不異なりとせば衆生は精進することなくして却て之が爲に毒せらるべし。此の間の調和を取らんが爲には、如上の説明をなすは蓋し止むを得ざることなり。之を哲學的要求よりして一元的に見んと努めながらも其の實際的方面よりする時は二元的に見ざるを得ざるなり。以下二三を引用して之が典據とせん。(此の部分は原典と大同小異なれば漢譯を引用す)

縮刷藏經黃帙、六。八七(左)には次の如く之を云へり。「……大慧、諸識有二種生住滅、非臆度者之所能知、所謂相續生及相生、相續住及相住、相續滅及相滅、諸識有三相、謂轉相業相眞相。大慧、識廣說有八、畧則唯二(四卷楞伽經は三種ありとなして眞識を加ふ) 謂現識及分別事識、大慧、如明鏡中現諸色像、現識亦爾、大慧、現識與分別事識、此二種無異相互爲因、大慧、現識以不思議重變爲因、分別事識、以分別境界及無始戲論習氣爲因、大慧阿賴耶識虛妄分別種々習氣滅、即一切根識滅、是名相滅、大慧、相續滅者、謂所依因滅及所緣滅即相續滅、所依因者、謂無始戲論虛妄習氣、所緣者、謂自心所見分別境界、大慧、譬如泥團與微塵非異、非不異、金與莊嚴具亦如是、

大慧、若泥團與微塵異者、應非彼成而實彼成、是故不異、若不異者、泥團微塵應無分別、「分別は區別の義なり」、
大慧、轉識、藏識若異者、藏識非彼因、若不異者、轉識滅藏識亦應滅、然彼真相不滅、大慧、識真相不滅但業相滅、
若眞相滅者、藏識應滅、若藏識滅者卽不異外道斷滅論」(黃六の四丁右十行)

其の他阿賴耶識より諸識開展の様を説いて曰く、(黃六、八八左)

(一)……大慧以此四阿賴耶識如瀑流水、生轉識浪、如眼識餘亦如是、於一切諸根微塵毛孔眼等、轉識或頓生、譬如明境現象色像、或漸生、猶如猛風吹大海水、心海亦爾、境界風吹起諸海浪、相續不斷……」

【註記】(一)四とは轉識が阿賴耶より開展する四種の因を言ふ。此の四種因は前述の不思議熏變因より由來せるものなるべし。四

種因とは、

1、不覺自心現而取境故 (Svagītadṛśyagrahanānāvahodhaṭṭah)

2、無始世來執着於色虛妄習氣故 (Anādikāprapañcadausthulyamrūpavāsanābhinivesitah)

3、識本性如是故 (Vijñanapraktisvabhāvataḥ)

4、樂見種々諸識相故 (Vicitrarūpalāṣṭakauṭuhalataḥ)

由是觀之、阿賴耶識は一切萬有の本源にして瀑流の其れの如く、不斷に流れ刹那に遷さるる法なれども而も、相續、不斷、不滅、分別習氣の長養する處となり。無始以來四種の因に依りて恰も大海の境界風に依りて波浪生ずるが如く種々の差別相を轉生す、然ども若し心外の諸法は皆自心所現の法なることを覺り、萬有一切は本來都て唯心にして、有と思ふは假有のみ真有にあらず、從て分別妄想滅すれば轉識業相滅し、諸識浪亦滅し阿賴耶大海風なく浪なく、平々坦々と

して玲瓏大圓鏡の如くなるに至りて隨入諸佛地し、自覺聖智境界の涅槃に達することを得と説かんとするものなり。

註、引用文中但業相滅するも、識真不滅と云ふ文を以て、此の中業相を阿賴耶が動き始めたる方面を見、眞相を以て不動の方面と見れば如來藏に動、靜、善不善の因を認むると同一思想となるべし。即ち阿賴耶識には方に刹那滅に流れる部分と常住なる部分との二方面を認むることとなるべし。單に相續常住のみを以て阿賴耶識の不滅を力説するとは思はれざるなり。

三、解深密經所説の阿賴耶識との比較

本經所説の阿賴耶識に就ては上述の如くなるが、其の阿賴耶識を説明するに、多くは比喩的に漠然と之を言ふ傾きありて、確實なる概念を與ふるには不充分なる嫌あり。阿賴耶識と現識との相違、又分別事識と轉識と別立せし所以に就ては一言だに論及せる處を見ず、又轉識の開展の狀を述ぶるにしても甚だ大ざっぱな比喩を以てするのみにて、眞相と阿賴耶識の關係に至りても亦何事をも説くなし。爲之に名詞相互の概念の範圍甚だ不明瞭なるを免かれず。

然るに解深密經所説の阿賴耶識及至之と關連する思想に至りては、遙かに明瞭なる概念を與ふるを否む能はざるものあり。其の論述の方法に至りても、楞伽の其れよりは更に學術的にして又よく因明の論法を用ふるが如し。彼此對照の便の爲に下に其の文の一部を引用すべし。

「我爲汝說心意意識深密之義、廣惠、於諸六道生死之中、何等何等衆生卵生胎生濕生化、受身生身及增長身、初有一切種子心生、和合不同差別增長、廣所成就依二種取。何等二種、一者謂依色心根取、二者依於不分別相。言語戲論薰集（習）取、廣惠、色界中依二種取生、無色界中非二種取生、廣惠、彼識名阿陀那識、何以故以阿陀那識取此身相應身故。廣惠、亦名阿賴耶識、以何故、以彼身中住著故、一體相應故、廣惠、亦名爲心以何故、以彼心爲色聲

楞伽經に於ける「阿賴耶識」と『如來藏』とに就て

111

香味觸法增長故、廣惠、以彼阿陀那識能生六種識、謂所眼耳鼻舌身意識身、廣惠、若一境界現前一識身起、無分別意識即共眼識一時俱生、廣惠、若二三四五境界現前五識身起、無分別意識即與五識一時俱生、廣惠、譬如流水若一緣起即生一波、若二三乃至衆多因緣俱起即生衆波、廣惠、而彼流水亦不斷絕」

更に又、淨明圓鏡の譬を以て巧に阿賴耶識と餘識との關係を説くものあれども今は之を擧ぐることを略す（黃帙八、

六九右）

上記引用文は深密解脫經（菩提流支譯）の所譯にかかるものなるが、之と相ひ並びて玄辨の所譯なる解深密經（黃帙八、四九左）を見る時は又更に其の意を明らかにすべし。然し茲に之を引用することを略す。

(+) (2) 無分別意識とあるは恐らく分別意識の誤植なるべし。玄辨譯には之を分別意識とせり（黃八、四九、下ヨリ一行ト二行ニアリ）

四、如來藏 (tathāgatagarbhah)

楞伽經にては如來藏を以て如何に説明を爲すか、ムニルー—— (takakusu. 21. b2) ——に依れば、

「Tataḥgatagarbhah punar bhagavatā Sūtrāntapāṭe' nuvarṇitah sa ca kila tvayā prakṛtiprabhāvaraṇaviśudhādi-viśuddha eva varṇyate dvātrīṁśallakṣaṇadharah sarvasatvadchāntargataḥ malāṅghamūlyaratnamalina vastuparivṛṣṭitam iva skandhadhātvāyatana vastuparivṛṣṭito rāga devaśamohābhūta parikalpamala malino nityo dhruvaśāvataś ca bhagavatā varṇitah…… (漢譯、黃六、九右参照)

(註、世尊修多羅說如來藏自性清淨、轉三十二相、入於一切衆生身中、如大價寶垢衣所纏、如來之藏常住不變、亦復

如是、而陰界入垢衣所纏、貪欲恚癡不實妄想塵勞所汚、(黃六、九丁右))

即ち如來藏は *dhr̥uva*(常恒)にして且つ *nitya* (常住)、自性清淨 (*prakṛtiprabhāśvaravīśuddhaḥ*) 大價寶にして且つ
又永劫 (*mahārghamūlyaratnaśīvataḥ*) なるものが三毒の垢衣を纏ふて衆生身に入りしものなりと言ふ。

此の説明も亦甚だ興味あるものにして、吾人は既に阿賴耶識に就て批評せしと同一の批評をなすに再會せり。常住、
永劫、常恒、不變、清淨無垢なる如來藏が抑も如何にして垢衣を纏ふか如く衆生身に入りしや、既に常恒、常住なるも
のならば如何様にしても隨縁する筈なきは見易き道理なり。既に隨縁するの可能性のあるものならば、常住常恒、本性
清淨無垢と言ふ資格なきなり。楞伽經は此の如來藏説に於ても亦阿賴耶識説の陥入りし同一の自家撞着に陥入りしもの
と云ふべし。獨り本經のみならず、苟も萬有の本體を以て一元に還元せんとするものの必らず陥入るべき自家撞着な
り。萬有は事實として物心の對立、善惡(倫理學的觀察よりせば)の對立あるを否むを得ず、而も哲學的研究心の要求
としては之を一元論に還元せんとす。宗教哲學に於ても亦然り、而も實際に於ては之を許容せざるなり。茲に於て、一
元に全く相反する二方面を認めて此の窮處を透闇せんとするものにして、これ既に矛盾を侵せるものなり。本經も亦此の
矛盾に陥りたるなり。後代法相宗に於て(特に護法論師以後)眞如の緣起を許さるは蓋し此の自家撞着を避けんが
爲にして、而も之が爲に現象界の説明は満足し得べけんも、其の解脱境界の涅槃に至り二元論に陥入るのを免ぬかれざ
るなり。數論に於ても然りとす。果せる哉、本性清淨恒常の如來藏の隨縁を説明せんが爲に如來藏に全く相ひ反する二
面を認めざるべからざりしなり。

(Kawaguchi. 107. b. 3. — Takakusu は此の部分缺葉す) に次の句あるを見る。

Tathāgatagarbhah Kuśalākuśalāhetukah(如來藏は絕不善の因なり)と明に善と不善の兩因を如來藏に求めたるなり。然じむ、此は現象界説明の窮地を脱して、却て自家の主張に相反するの欠陥に陥りたるものなり。楞伽經は如來藏に就き又次の如の説明をなすを見る。

Tathāgatagarbhah punar malāmate anubhūtasukhadulkhahetusalitalah pravarttate na Vivarttate — (Takakusu.⁽¹⁾)

64. b. 5)(複、大慧よ、如來藏は受けたる苦樂因と俱に生じ又滅す) 又 (正本、66. a. 4) に記、

(1) nu ハ恐ラク ca ノ誤ナルベシ

Tathāgatagarbhah punar mahāmate samāratinirvāna Sukhadulkhahetukah (複、大慧よ如來藏は流轉、涅槃・苦樂の因である) 等あり、此等は皆現象界を説明し、兼ねて輪廻の主體、解脱の理由を説明せんが爲めに付加せる屬性にして、何れも如來藏本來の自性に取つては相應しからざる思想と言ふ可きなり。

此の批評は免に角として、如來藏の不善因=Akuśalāhetuka に依りて如來藏は衆生身に入りたるものなり。而して如來藏が斯かる方面を取り来るに於て Šūksma (微細又は微妙の義) と等しき意味を有するに至る。Šūksma と言ふ語は阿賴耶識の行相を説く場合にも出て来る語にして、數論にて言ふ細身と同意味に見らるゝこともあり、數論の場合には明らかに Šūksamasarīra (微細身) と言ふも本經に於ては單に Šūksma と言ふのみなり。

本經に依れば、Šūksma は如何なる形相色彩にも自在に應じて、その物に隨入し得るやうに衆色如意のものにして、又一種の靈的物質の如くなりて、衆生の身に入るものと考へらるゝが如し。

要するに如來藏には二義あり、一は實在界の如來藏にして此は本性清淨常恒、永劫不變なるものにして眞如と同じ。

其の第二義は現象界に於ける如來藏にして吾人は之を垂迹としての如來藏と言はんとするものなり。此は蘊界處の垢衣を纏ふて衆生身に入れるものにして阿賴耶識と等しく無始世來の妄想分別習氣の所熏となり、刹那法にして且つ善、不善輪廻轉生の主體、苦樂の因を伴ふものにして所謂る *Tathāgatagarbhāḥ ālayavijñānam* samśabditali (如來藏名阿賴耶識) 即ち之なり。

吾人は順序として次に如來藏と阿賴耶識との關係に就て述べざるべからずも、之れより先に楞伽經が謂所 *śurīnā-la-levi*(勝鬘夫人)をして *Tathāgatagarbhāḥ ālayavijñānam* saptavijñānāni = (如來藏名阿賴耶識七識)を開演せしめんとの懸記に基き、勝鬘夫人が如何に勝鬘經に於て説けるかを比較して見、兼ねて又 *Mahāvaipūyatathāgatāgarbhastūtra* (大方等如來藏經)と名くる經(字帙、三、二七—三十)所説の如來藏とも比較論評すべし。

註、勝鬘夫人をして如來藏等の開演を懸記せし所は Kawaguchi 109. n. 1 漢譯にては黃六、二十五左を見るべし。Takaku の此の部分は缺葉す。

(1) 勝鬘獅子吼經所説の如來藏に就て

勝鬘夫人開演の如來藏は、楞伽經所説と殆んど大同小異なりと言ふべし。謂ひらく、如來藏は甚深にして微細難知、非思量境界(地帙、十二、五十七右)と言ひ、又有爲相を離れ、常住不變、又曰く、不離不斷不脫、不異不思議佛法、又曰く、如來藏は法身藏世間上々藏、自性清淨藏、此性清淨、一一等殆んど楞伽所説の如來藏と同一思想なることを見

る。而して如來藏が如何にして生死の巻に徘徊するに至りしや、の理由を説明するに於ても亦楞伽所說と大同なり。即ち清淨不變常住なる如來藏に之と正反對なる屬性を認めて以て不善の現象を説明せんとするにあり。曰く「生死者依如來藏」又曰く「有如來藏故說生死」(地、十二、五八右) 如來法身不離煩惱藏名如來藏 (地十二、五十七左)⁽¹⁾ 等と言ひ、楞伽經の陥入りし矛盾にも同じく陥入るを見る。而も、一元と二元の調和を計らんが爲に種々なる苦心の痕跡を認むる處あり。此の點は楞伽經が無難作に自家撞着を述べ居ると多少趣を異にする。又勝鬘經は如來藏に二種を認め一を空如來藏として、楞伽經に所謂る如來藏と名くる阿賴耶識の位を與ふるが如し。而して他を不空如來藏となし、之れには本地としての如來藏の地位を與へんとするが如し。其の文に曰く「有二種如來藏、空智、世尊、空如來藏、若離若脫、若異、一切煩惱藏、世尊、不空如來藏、過於恒沙不離不脫不異不思議佛法」(地帙、十二、五十七左)

※⁽¹⁾ 漢譯にては『生死者依如來藏』となせども、西藏語譯にては de-bšin-gshegs-pa-i sñin-po-ni hñkhor-ba na hton-pa
テ シン シェク パイ シンボニ ハンホルバ ナ ハトンパ
laos ラオス とあり、『如來藏は生死輪廻する者に於て依憑なり』又は『如來藏は生死輪廻する者の歸依所なり』と譯れる。かくのじにて、生死の依つて生ずる由以を如來藏に求むる意味としては少し行き過ぎはせぬやの觀あり。今、漢譯、『生死者依如來藏』の句を『生死者の依は如來藏なり』とせば西藏譯と相應すべし。

又如來藏を以て解脫涅槃の理由となす所以を爲すに於ても、理想論としての一元論と實際論としての二元論との調和を圖るに苦心せる痕を認むることを得。而も遂に此の調和の不可能なることを悟り、次の如き言「……唯佛世尊、實眼實智——云々——」を爲して難關を避くるを見る。下に上述の典據として重要なものを引用して説明に代へんとす。

(地帙、十二、五八右)「世尊、生死者依如來藏、以如來藏故、說本際不可知、世尊、有如來藏故說生死、是名善

說、世尊、生死生死者、諸受根沒、次第不受根起、是名生死、世尊、死生者此二法是如來藏、世間言說故、有死有生、死者謂根壞、生者新諸根起、非如來藏有生有死、如來藏者離有爲相、如來藏常住不變、是故如來藏、是依是持是建立、世尊、不離不斷不異不思議佛法、世尊、斷脫異外有爲法依持建立者、是如來藏、世尊、若無如來藏者、不得厭苦樂求涅槃、何以故、於六識及心法智、此七法剎那不住、不種衆苦、不得厭苦樂求涅槃、世尊、如來藏者無前際不起不滅法、種諸苦得厭苦樂求涅槃、世尊、如來藏者、非我非衆生非命非人、如來藏者、墮身見衆生顛倒衆生空亂竟衆生、非其境界、世尊如來藏者、是法界藏、法身身藏、出世間上々藏、自性清淨藏、此性清淨、如來藏而客塵煩惱上煩惱所染、不思議如來境界、何以故、剎那善心、非煩惱所染、剎那不善心亦非煩惱所染、煩惱不觸心、心不觸煩惱。

云何不觸法、而能得染心、世尊、然有煩惱有煩惱染心、自性清淨心、而有染者、難可了知、唯佛世尊、實眼實智、爲法根本、爲通達法、爲正法依、如實知見、勝鬘夫人、說是難解之法、問於佛時、佛卽隨喜、如是如是、自性清淨心、而染汙難可了知、有二法難可了知、謂自性清淨心、難可了知、彼心爲煩惱所染亦難了知、如此二法、汝及成就大法菩薩摩訥薩乃能聽受、諸餘聲聞、唯信佛語（勝鬘經）」と。

尙依然として自性清淨心なるものが、煩惱所染の理由の難可了知なるを免ぬかれずして、遂に唯信佛語となすを見る。然れども、其の矛盾より脱せんと努力せし痕は充分認むることを得るものあり。此の點に於て、楞伽經所說の論法とは大いに相違する所なり。而も何れの思想も同一思想にして、楞伽經所說と雖も其の論を追及すれば勝鬘經の其れと同一の思想階梯に達すべきは明かなることなり。

終りに附記すべきは、此の勝鬘經は明らかに真如隨緣說を爲すも、楞伽經は見方に依りては勿論隨緣說とも見ゆるも、

(2) 亦真如不隨緣說をなすが如き——少なくとも其の傾向を持つ——點もあるなり。

(1) 此の事は既に楞伽經に勝鬘夫人を豫言しあれば、勿論なりと雖も免に角に楞伽經所說の如來藏は勝鬘經の其れよりは説明の點に於て劣れるは事實なり。

(2) 黃帙、六、九十二右 (Takki, 21. b. 21—) の文中如來藏清淨、常恒、無有變易と言ふ思想と、具三十二相、在於衆生身中なる所の如來藏との關係に就て、又、清淨なる如來藏が如何にして垢衣を纏ひしやの説明なき處より、此の二つの如來藏を別立と見る點に於て真如不隨緣の傾向を有するが如く見らるるものなり。

(口) 大方等如來藏所說の如來藏に就て (Mahāvaiḍūya tathāgarbhasūtraam)

上述の勝鬘經の場合に於ても、如來藏は多少具象の色彩を帶ぶるが如き觀ありしが、如來藏經にありては更に一步を進め抽象的に適切に如來藏を以て「佛性」となし、又は「如來性」として「藏」を「性」を以て代へんとするが如し。而して此の如來性は一切衆生皆具有する所にして常住不變煩惱身中にあるて、而も無染汚なりとなす。此の經所說の如來藏說は真如不隨緣說の傾向を大に有するが如し。此の點は前述二經と趣を異にする處にして、其の他如來藏其れ自身の本體論的性質は大同なるが如し。下に一二三の文を引用して吾人の推測に典據を與ふべし。

「善男子、一切衆生、雖在諸趣煩惱身中、有如來藏常無染污、德相備足如我無異」(宇帙二、二十八右)

又曰く……「善男子、諸佛法爾、若佛出世、若不出世、一切衆生如來之藏常住不變、但彼衆生煩惱覆故、如來出世廣爲說法、除滅塵勞淨一切智……」(同上)

又曰く「……如是、善男子、如來觀察一切衆生輪轉生死受諸苦毒、其身皆有如來寶藏……中略……善男子、莫自輕鄙汝等自身皆有佛性」(宇二、二十九右)

由是觀之、如來藏は性質に於ては前二經と大同小異なるも、如來藏を如來性(宇三、二十八左掲)、又佛性と言ふは一段の進歩と言ふべし。然れども、此の經は如來藏即ち本來自性清淨なる如來藏が、如何にして衆生身中に在りて無染汚なるかの理由は不間に附せり。蓋し此の經も楞伽經と等しく如來藏を以て解脱、修行の目標となし之れに躊躇に進まんとするが爲に單に之を目標なりと信する迄の程度に於ける説明のみを加へて、其の餘は之を措て説かざるものか、殊に此の經は禪定を主として説くを見ても察ら説明的方面は一次的として説くより見ても此の推測は妥當ならん。

註、起信論所説の如來藏心と楞伽所説とに就ては他日に之を論ぜんと思ふ。

五、『楞伽經に於ける『如來藏』と『阿賴耶識』との關係に就いて

如來藏及び阿賴耶識に就いて楞伽經が如何様に説き居るかに就いて一言論及せんとするものなり。

楞伽經に依れば、阿賴耶識と如來藏との關係は、或は同位關係の如く見ゆるあり、或は能產、所產の關係に立つが如く見ゆることありて、從つて其の關係甚だ不明瞭なる點を有するなり。先づ下に其の能產、所產の關係に立つ場合の例を引用すべし。(Kawa. 107. 6. 3——)(Taka. 60 に相當するも此部分缺葉す)に依れば、

Tathāgatagarbho mahāmate kuśalākuśalahetukah sarvajanmagatikarttā pravarttate naṭavad gatisaṅkāṭa ātmātmī-
yavāṇijitū tadaṇavabodhāt trisaṅgatipratyaye Kriyāyogaḥ pravarttate na ca tīṭhā avabudhyante kāraṇābhiniive-
(1)
sābhiniivistāḥ anādikāravividhaprapāñcadausṭhūlyavāsanavasita ālayavijñanasaṁśabdītah……

楞伽經に於ける『阿賴耶識』と『如來藏』とに就て

(1) *anādikāla* と等し。

「如來之藏是善不善因。能遍興造一切趣生。譬如伎兒變現諸趣離我我所、不覺彼故、三緣和合方便而生。外道不覺計著作者。爲無始虛偽惡習所董。名爲識藏。(縮藏黃帙六。二十五丁左六行)」

と、之に依りて見れば、阿賴耶識は如來藏の不善因の爲に *sarvajanmagati* (一切の生趣) を遣り無始の虛妄習氣、計着の熏ずる處となりたるものに對して名けたるものにして、恰も起信論に於ける心生滅門に相當するものなりと言ふべし。但し、如來藏の不善因は、無始の無明に依りて薰せられたる後天的のものなりや、將を先天的に不善因と善因とを認めんとするや、に就いては一言の説明を加ふる處なし。然れども所薰となるべき如來藏に不善因なしには所薰らるる筈なれば、理論上先天的に不善因の存在を認めざるべからざるべく、從て二元論に陥入らざるを得ず。

其れが先天的なりや後天的なりやの説はなくとも、兎に角、楞伽經は如來藏を以て善、不善、一切趣生の作者 (*Sa-rvajanmagatikartṛ*) たる事を認め惡習氣所薰の方面に阿賴耶識と名けたることを説くが故に、此の點に於て阿賴耶識は如來藏に對して所産の地位に立ち、如來藏は能產の地位に立つものと言ふべし、下に其の關係を圖解すべし。

本地としての
如來藏
〔
如來藏
〔
阿賴耶識↑
垂迹としての
如來藏
〔
不善因〕
善因

垂迹としての如來藏は阿賴耶識を必然伴なふものにして、之なしには第二義、即ち垂迹としての如來藏は考へ得られるものなり。然れども本地としての如來藏に善惡因を認むるは少なくとも、本性清淨、不變、常恒と相反するものな

れば之れに直ちに善、不善の差別相を認むることを得ず。何れにしても阿賴耶識は如來藏開發の stage (階梯) に對して與へたる名稱なるが故に、所產の關係と見ることを得るなり。

然れども翻て之な考ふるに、本地としての如來藏に對しては、彼は所產の關係に立つかなれども、垂迹としての如來藏に對しては如何なる關係を有するや、これ吾人が次に述べんとする同位的關係なりとす。何んとなれば何賴耶識なしには垂迹の如來藏即ち善不善の因たる如來藏は考へ得られざるものなれば、之が爲に必然的に第二義の如來藏と阿賴耶とは不離の關係を有し、相ひ並稱せらるるに至り、軀て一は他の地位に代るか左なくば全く分離せざれば止まざるものなり。

楞伽經に於ては如來藏緣起を說くに八種識說を取りつゝも、其の間に於て暗黙の間に第九種なるものを暗示する處あると言ふ點は既に前節にて述べたるが如し。此の第九識に當るものは、本地としての如來藏若しくは垂迹としての如來藏が阿賴耶と分離せる時に於て、垂迹としての如來藏は分離の氣運に向はざれば阿賴耶識と同一視せらるべき運命を有するものなるべく、若し分離するとせば本地の如來藏裡に沒入すべきものなり。

楞伽經に於て、*Tathāgatagarbhāḥ ālayavijñanam samsabditah*(阿賴耶と名けらるる如來藏)と言ふ第八識は即ち第二次的如來藏と阿賴耶識とを同一位に置かれるものとしては考へ得ざる思想なり。之れ即ち吾人が同位關係あることを述ぶる所以なり。然れども、吾人は全く同位關係と言はずして同位的關係の傾向と言ふを穩當なりとすべし。

此の他、阿賴耶識を以て殆んど如來藏と同一に見し點も此の外に求むれば所々に散見する處なるも、今は如來藏とは沒交渉に全く賴耶緣起を説くが如きの觀を呈する文を擧げ、阿賴耶識に對して如何にして不滅性、永久性を求めるとす

るかの努力の痕を見ぐとか。換言わば、阿賴耶識を如何にして如來藏化するかその努力の痕を觀ぐべからむが如也。

evam eva mahāmate pravṛttivijñānāṇā ālayavijñānajātilakṣaṇāṇi yady anyāni syur anālayavijñānahetu kāni syuḥ
atha ananyāni pravṛttivijñānanirodho ālayavijñānanirodhaḥ syāt sa ca na bhavati svajātilakṣaṇanirodhaḥ / tasmat⁽¹⁾

mahāmate na svajātilakṣaṇanirodho vijñānāṇā kimtu karmalakṣaṇanirodhaḥ svajātilakṣaṇanirodhyamāne ālayavijñānani-⁽²⁾
rodhaḥ syāt | ālayavijñānē punar nirodhyamāne nirviśṭhāḥ tīrttakarocchedavadena ayan vādaḥ syāt (出版、P⁽³⁾)

38) (漢譯、黃六 4 '10')

(1) — nirodha ノガヨシ (2) — nirodhyamāno ノガヨシ

(3) nirviśṭhās ノガヨシ

〔大慧、轉識藏識真相若異者、藏識非因、若不異者、轉識滅藏識亦應滅、而自真相不滅、此故大慧、非自真相識滅、

但業相滅、若自真相滅者、藏識則滅、大慧、藏識滅者不異外道斷見論識。(漢譯四卷楞迦黃帙四丁右十行)〕

此の文にて最も注意すべきは、阿賴耶識と轉識とを區別し、阿賴耶識に不滅の方面を認めるべく、これが爲に
真相 (Jātilakṣaṇam) の不滅を説く、これを以て Alayavijñāna (阿賴耶識) の Svajātilakṣaṇam (自真相) と、以て如來
藏緣起の場合に於ける本地としての如來藏の如き立場の觀を呈せしむ。

自真相の不滅は、相續常住としての不滅の意よりは、更に深き常恒の不滅の意あるが如し。又一方に於て、相續不滅
と言ふ意の常住の意をも阿賴耶識中に認めんとするが如し、されば阿賴耶識を真相の方面より言ふ時は、本地如來藏の
如く、又轉識と對しての阿賴耶識を言ふ場合には刹那相續にして、而も不滅常住なりと言はんとするが如し。即ち阿賴

耶識と言ふ如來藏 (Tathāgatagarbhāḥ ālayavijñānam saṃśabdītah) に比すべきなり。

而して阿賴耶識を (Jāti-lakṣaṇa) 真相の方面よりする時は眞如とは明言せざる迄も、多少之れに近きものたらしめんとするが如し。

要するに楞伽經に於ては如來藏と阿賴耶識との關係は、如來藏緣起を説明する場合に於ては阿賴耶識は本地の如來藏に對しては不善に依れる所産の地位となり、垂迹としての如來藏即ち心生滅門の位としての如來藏に對しては同位的の關係を有し、調和せられたるが如くして又分離せんとする傾向を有す。又阿賴耶識緣起を説明する所にありては、阿賴耶識の自真相は常恒不滅にして本地の如來藏の常恒不變不滅と言ふに比すべく、轉識と並稱する阿賴耶識は如來藏緣起の場合に於ける所産としての阿賴耶識に比すべく、即ち垂迹としての如來藏に比すべきものと言ふべし。

註 楞伽經は阿賴耶識を中心とせる八識說と『阿賴耶識名如來藏』を中心とせる八識說の二説を有するも、此の二説は各々色彩を異にし、同一思潮の下に同時に出てたるものとしては考へ得られざる點あり、之れ楞伽經が多數の人の手に依りて時代を異にして改編、添加せられたるの疑を有する所以なり。

※ 西藏譯奧書に rgya-i-dpe より譯すとあり、rgya の意を支那と譯す場合と印度と譯す場合とありて内容を検討せざれば何れの譯とも斷じ得ざるも現在調べつゝある處に依れば rgya は rgya-gar (印度) と見る方が妥當なるがねし。

(未完)